

# 名古屋 文化 情報

2013

2

Feb.

No.347

NAGOYA  
Cultural  
Information



2013  
2  
Feb.

## Contents

二月のうた	2
2012年をふりかえって	3
この人と… 神野 公男さん(上) 聞き手/田中由紀子	6
2012年をふりかえって	8
おしらせ	10



### 表紙

作品

#### 「地の記憶」

(2011年/200×1680cm/岩絵具・箔・膠・麻紙・パネル)

自身の原風景、原体験を基にした作品です。原風景に感じる生命の奔流に身を置いた時、自らは共存する生命体の一つであると自覚し、共鳴し呼応した記憶を描いた作品です。  
高橋コレクション 会場コバヤシ画廊

濱田 樹里 (はまだ じゅり)

1973年 インドネシア生まれ

1999年 愛知県立芸術大学大学院美術研究科修了

2010年 名古屋市芸術奨励賞新人賞

2012年 第5回東山魁夷記念日経日本画大賞展大賞

2012年 名古屋市文化振興事業団第28回芸術創造賞

現在 名古屋造形大学日本画コース専任講師

二  
月  
の  
う  
た

立春

大  
辻  
隆  
弘  
お  
お  
つ  
じ  
た  
か  
じ  
ろ

枯れわたりたる葦の間に降るあめのし  
ばらくは歩に添ひてきこえ来

きさらぎの光のかへる庭隈に連翹は咲

き梅の花いまだ

冬ばれの陽ざしのなかに新しい眼鏡が

ひとつ欲しと思ひき

普段は二十四節気など気にしない。が、この季節だけはなぜかそれが気にかかる。小寒、大寒、立春、雨水、啓蟄……。半年ごとに移り変わる微妙な空気の感触がこれらの言葉には刻印されている。

立春。生徒がまだやってこない早朝の教室に立つ。空気は凜と冷やかだ。が、窓から斜めに差し込む光には、もう確かな明るさが加わっている。それを感ずると、心は春に向って走りだして、とまらない。  
(未来)

# 2012 1年をふりかえって

## 洋舞 長谷 義隆 (中日新聞放送芸能部編集委員)

中学校の保健体育の授業にダンスが導入され、中学生にとってダンスは身近ものとなってきた。音楽やファッションを含め若者に人気のヒップホップが健全化し、社会的にも認知されていく転機になるだろう。生徒たちのうまくなりたいという意欲をどう伸ばし、舞踊の底上げにつなげていくか。

一つのヒントがある。名古屋市内開催で第4回を迎えた「NFCC・全国ハイスクールダンスコンペティション」は、高校の部活・同好会が独創的な舞踊表現を競う場である。参加チームは年々増え14校30チーム、485人が熱いダンスバトルを繰り広げた。当初、作品志向が薄かったヒップホップ勢もレベルは向上。指導者の適切な助言があれば、さらに創造の芽は伸びるだろう。ダンス必修化をうけて、名古屋での中学校大会の開催を提唱したい。

少子化に不況が重なり、バレエや現代舞踊を習う子どもは年々減っている。一方でヒップホップ人口は急増、トップ層のレベルは飛躍的に高まっている。異風な舞踊言語が切り開く身体表現はもっと注目されていい。

名古屋の洋舞界は群雄割拠といえば聞こえがいいが、衆議院選挙なみに中小が乱立。客演で生計をたてる男性プロは増えてきたが、優秀な女性の人材流出はやまない。

バレエでは上演の質向上と観客動員を狙って、深川秀夫や市川透ら力のある振付家を担ぎ「この指とまれ」方式でダンサーを糾合する公演が主流である。

その代表格はテアトル・ド・バレエカンパニーの「深川秀夫版 シンデレラ物語」。プロコフィエフの音楽の一音たりとも舞踊化しつくそうという深川の振付は、時に音楽に過剰に反応してストーリーから逸脱する場面もあるが、全編

舞踊づくしという推進力が魅力だ。

バレエ・ネクストは市川透振付の物語バレエ「イノセント・グレイ」を初演。人間とは何か、時代の光と影に正面から向き合う大作だ。しかし、寄り合い所帯の泣き所か、出演者に見せ場をつくってやろうという配慮が災いし、勢い冗長になったのは惜まれる。



テアトル・ド・バレエカンパニー  
「深川秀夫版 シンデレラ物語」(11月14日)  
撮影：岡村昌夫



松岡伶子バレエ団  
「あゝ野麦峠」(11月24・25日)  
撮影：むらし和明

単独公演では、松岡伶子バレエ団が再演した「あゝ野麦峠」が秀逸。伊藤優花、早矢仕友香らの好演で、ワーキングプア、周辺国との紛争がクローズアップされるこの時代を照射した。ただ、労働哀歌に矮小化されがちで、黒幕の政商を登場させるなど演出面でもうひと工夫ほしかった。

機能不全に陥っている日本バレエ協会

中部支部に対して、現代舞踊協会中部支部の奮闘が目立つ。企画公演「花より華らしく…芸術に生きた女・女・女」、石川雅実ら中堅が活躍した「モダンダンスエクステンション」が充実。ジャズダンスの三代真史と坂本久美子は芥川也寸志原作の「蜘蛛の糸」を一捻りし、ハッピーエンドの新解釈で進境をみせた。

## 演劇 河野 光雄 (名古屋演劇ペンクラブ理事)

この1年、本稿の締め切りまでに地元劇団、企画団体の89作品を観た。ふりかえると、個人では「オイスターズ」(劇団名)の作・演出家の平塚直隆が、長久手市文化の家『劇王』(2月)の九代目劇王になったり、日本演出者協会「若手演出家コンクール2011」(3月)で最優秀賞を受賞するなど、活躍が目立った。劇団では東日本大震災による原発事故に関わる作品や劇団・劇場の創立の周年を記念する

作品が多かったのも、それに触れたあと、他の注目された作品について記述する。

原発関連で印象に残ったのは、33年前に原発事故を予見したかのように劣悪な原発作業員の悲劇を描いた岡安伸治の脚本を上演した劇団演集『とおりゃんせ』(3月)。演劇と舞踊のコラボレーションで、震災の犠牲者の追悼と原発への無関心の罪を問い掛けた、“核兵器廃絶・平和を守る



核兵器廃絶・平和を守る名古屋舞台人の集い  
『想う あの日、3・11』(8月4日)

名古屋舞台人の集い”(上演団体名)が、創立30周年を記念して上演した『想う あの日、3・11』(8月)。仮

想の電力会社を設定し、社員と経営者の苦悩を通して電力の歴史と今後を考えさせた、“愛知・県民の手による平和を願う演劇の会”(上演団体名)が、創立30周年記念第2弾として上演した『FUKUSHIMA～原発のウソと真実～』(8月)。13年前に震災や原発事故を予感したかのように社会の混乱を描いた坂手洋二の脚本を現代に置き換え、創立40周年記念として上演したセツ寺共同スタジオプロデュース『東京アパッチ族』(9月)である。

周年記念では、創立55周年の劇団名古屋が『こんにちは、母さん』(6月)、『切り子たちの秋』(11月)の2作品、創立50周年の劇団名芸が前年秋の『コンビニ哀歌』を手始めに、2012年は『佐山家の惜春』(3月)、『じごくのそべえ』(7月)、『二人の長い影』(11月)の3作品、創立40周年の劇団シアター・ウィークエンドが、第1弾『音吉物語』(11月)を上演した。その他、愛知県芸術劇場

が開館20周年、名古屋市千種文化小劇場・中川文化小劇場が開館10周年を迎えている。



演劇：渡山博崇



演劇：宮谷達也

AAFリージョナル・シアター 2012  
『ゴドー氏の仕事』(7月28日・29日)

注目されたのは愛知県文化振興事業団(略称AAF)の「AAFリージョナル・シアター」である。これは東京集中の演劇を地方(リージョナル)に取り戻そうと2011年から始まった企画で、前年につづき京都の演劇人(7月14日・15日)と地元演劇人(7月28日・29日)が作品を競演した。会場

はいずれも愛知県芸術劇場小ホールである。ユニークだったのが、一つの戯曲を二人の演出家が別作品として上演したことで、演出が別人だと全く別の作品になることを明らかにした。地元演劇人は、『ゴドー氏の仕事』(作・平塚直隆)を渡山博崇、宮谷達也の二人が演出、前者は静、後者は動、全く逆の舞台になり、演劇の面白さを満喫させた。

## 洋楽 早川立大(音楽ジャーナリスト)

東日本大震災・福島原発事故に続いて、尖閣諸島をめぐる日中間の対立が影を落とし、クラシック音楽界にも余波が及んだけれども、音楽人の努力により、記憶に残る舞台が多くあったことは幸いだ。

まずは、マーラーの交響曲第8番『千人の交響曲』演奏会を挙げる(7月15、16日)。作曲家の没後100年を記念して「名古屋マーラー音楽祭」が実施した交響曲全曲演奏の掉尾を飾り、この地方のアマチュア・オーケストラと合唱団が総力を挙げて取り組んだ。900人近い出演者は、さしもの愛知県芸術劇場大ホールの舞台を狭く思わせて壮観。日本を代表する指揮者・井上道義の強力なタクトの下、感動的な演奏を繰り広げた。2日間とも満席、観客の熱気も凄く、公演成功に花を添えた。

愛知県文化振興事業団のプロデュース・オペラ、ドニゼッティの『ランメルモールのルチア』はどこに出しても恥ずかしくない出来栄であった(9月17日、同大ホール)。佐藤美枝子(ルチア)、村上敏明(エドガルド)、堀内康雄(エンリーコ)をはじめとする独唱陣とAC合唱団、名古屋フィルハーモニー交響楽団をまとめたマッシモ・ザネッティの指揮、岩



名古屋マーラー音楽祭第2部「千人の交響曲」  
(7月15日、愛知県芸術劇場大ホール)

田達宗の演出がイタリア・ロマン主義オペラの傑作の出色の公演を導いた。名古屋二期会のモーツァルト『フィガロの結婚』公演(10月27、28日、市民会館大ホール)は健闘したものの、広い会場を埋めるほどの充実ぶりではなかった。

オーケストラでは名古屋フィルが定期演奏会で安定した好演を続けた。中では、愛知出身の田村響がベートーヴェンのピアノ協奏曲『皇帝』で素晴らしいソロをつとめた第390回(4月20、21日)、次期常任指揮者マーティン・ブラビンスがラフマニノフの交響曲第3番をじっくりと聞かせた第393回(7月6、7日)を挙げておこう(以上愛知県



名古屋フィルハーモニー交響楽団  
第390回定期演奏会と田村響  
(4月20日、愛知県芸術劇場コンサートホール)  
撮影：中川幸作

リサイタルでは女声に指を屈する。ソプラノの小林史子(4月13日)、山本真由美(4月20日)、荻野砂和子(10月6日)、

芸術劇場コンサートホール)。セントラル愛知交響楽団の定期公演では、日本の管弦楽曲特集を力演した第123回が印象深い(11月2日、しらかわホール)。

メゾソプラノの大橋多美子(5月12日)がそれぞれ年輪を感じさせる優れた歌唱を披露した(以上ザ・コンサートホール)。器楽では、いずれも宗次ホールでのチェロの天野武子(1月22日)、ピアノの武本京子とワルシャワ弦楽四重奏団の共演(6月30日)、ギターの谷辺昌央(9月8日)だ。

最後になるが、名古屋音楽ペンクラブ賞の受賞者コンサートがスタートした。初回は伊藤仁美、山下勝、鈴木真貴子(以上ピアノ)、島田真千子(ヴァイオリン)、小林史子(ソプラノ)と多彩な顔ぶれ(11月14日、ザ・コンサートホール)。受賞に恥じない演奏を繰り広げ、今後への期待を高めた。

## 能楽 竹尾 邦太郎 (能楽評論家)

1月3日、恒例『名古屋能楽堂正月特別公演』注連を張った清々しい舞台に淑気満ち、「翁」は久田勘鷗、悠揚知らざる翁舞に寿福を齎す。

2月『関西観世花の会』汎関西女流シテ方の会で「羽衣・彩色之伝」近藤幸江。衣を返して貰えなくては詮方もなく、哀調を帯びた全女性陣の地謡と相俟って空を見上げる風情の切なさ女流のシテならでは。

4月『名古屋梅猶会』「通小町」小松勝憲。小野小町に百夜通いを強いられ九十九夜、通ったものの空しく悶死した四位少将。通いつめる行為はストーカーに似るが、恋の優位に立った女人のパワー・ハラスメントとも。生真面目な男の弱味か。

5月『青陽会』「杜若」八神孝充。在原業平、東下りて三河国八橋に憩う面影も見えようというもの。杜若の艶は業平のそれとも思われる。

6月『宝生会』「是界」和久莊太郎・内藤飛能。唐の大天狗是界坊、本邦の太郎坊を語らい佛教の聖地比叡山を陥れようと企むが、僧正に退けられる。若手二人の潑刺とした遣り取りが小気味よい。

7月『名古屋七月定例公演』「俊寛」梅田邦久。平家討伐の謀議が露見、鬼界ヶ島へ配流された三人の中、俊寛だけが恩赦に与れない哀切。極限状況下の心理描写の巧さ。

『第13回 御洒落名匠狂言会』「文蔵」佐藤友彦。伯父御から馳走に与った太郎冠者に何を食ったかを問う主。忘れたら思い出せ、と責められれば、確が御愛読の草子の中に、と。主が石橋山の合戦譚を空で滔々と語る中、「真田の与市が傳に文蔵」ときたとき、それを食べた。文蔵は温糟粥の擬似音、主は「骨を折らせ居る」と叱りはするも、語るうち興に乗り、己の話術に満更でも無さそうな風情に妙味。

『第6回 西村同門会研究能』「藍染川・追善留」シテ本田光洋・ワキ飯富雅介、脇方の秘曲。大宰府の神主(ワキ)の在京中、契った女(シテ)が子を連れて逢いに西下。

相憎く不在で女は宿に文を託すが、妻に読まれて奸策を巡らされ、女が入水したと知るワキ、亡骸の前で子の将来を約すと語りかけるところ(写真)肅然とする。

8月『第28回 衣斐正宜後援会能』「綾鼓」衣斐正宜。恋の貴賤が齎す悲劇。庭掃きの老人の募る恋慕に、綾を張った鼓を鳴らしたら見(まみ)えようと女御。鳴ろう筈もなく絶望に入水の老人、怨霊となって報復する執念の凄まじさを鮮烈にみせる。

9月『第34回 邦謡会能』「班女・笹之伝」梅田邦久。遊女・花子(シテ)、吉田少将との一夜の契り忘れず、再会を約し互いに交した形見の扇に一途な思慕。狂おしい恋情、濃密にみせる。

10月『第2回 久田観正能』「屋島・大事」久田勘鷗。弓に擬した扇ポトリと落し、流される様を追う心に一ノ松へ。扇を見込み敵に「取られじ」と手綱を執る型に戻ると扇に近寄り流し足に、太刀抜き敵の熊手を切り払うと扇拾い上げる一拵の型の、きびきびした力強さに生彩。

12月『第11回 三の会』「蜂」野村又二郎。本邦初演、珍しい独り狂言は「見物左衛門・花見」と同工。花見の喜楽斎、木登りして舞見物に振りを真似、足踏み外し、落



西村同門会研究能  
「藍染川・追善留」  
飯富雅介(ワキ)  
(撮影：能楽写真家協会会員 杉浦賢次)

ちてそこに落着き、独酌に着の小舞謡は「放下僧」など。後見に蜂の羽音の唸り声をさせるのが味噌か。刺されて「許せ許せ」と逃げる。

朗報は寛鋌一氏主管「下田雄三文庫」が発足。平成24年度名古屋市芸術特賞を狂言方・和泉流・佐藤友彦が受賞。悲報は宝生流・鬼頭嘉男(94)、幸清流・福井良治(58)、金春流・伏原靖二(78)諸氏の長逝、謹んで御冥福をお祈りする。

## この人と...



Gallery HAM代表・ディレクター

じんのきみお

## 神野 公男さん 上

## ベーコンに魅せられ現代美術の世界へ

名古屋市千種区のGallery HAMは、田中敦子や草間彌生、イケムラレイコなどを紹介する現代美術ギャラリー。1991（平成3）年にここを開廊した神野公男さんは、欧米の現代美術のコレクターとしても知られるが、1970年代末からギャラリーに勤務し、名古屋の現代美術シーンの創生期にかかわってきた。今回は、その生い立ちから現代美術にかかわるようになるまでを紹介したい。

（聞き手：田中由紀子）

## 絵と音楽に親しんだ子ども時代

神野さんは1946（昭和21）年、名古屋市北区の生まれ。戦後の混乱がまだ冷めやらぬ中、自宅の縁側で産声を上げたという神野さんだが、幼少から美術や音楽に親しんでいた。

「美術文化協会で活動されていた画家の岡田徹さんが近所に住んでいらして、お寺か幼稚園かで絵画教室を開いていらっしゃり、幼稚園の頃から僕もそこへ通っていました。母は家の簡易郵便局での手伝いがありましたし、祖父母も畑仕事で忙しく、僕の面倒を見てもらえないので、習い事

でもさせるかという感じで。嫌々習っていたわけではありませんでしたが、絵を描くのが特別好きというわけでもありませんでした」。

教員をしていた父親の練習用にオルガンがあり、先生が自宅に来て音楽教室が開かれていたという神野家。

「僕はバイオリンを習っていましたが、オーケストラに入ると、練習はもちろん、演奏会やら合宿で忙しく、近所の友達と遊べないのが嫌でした」。

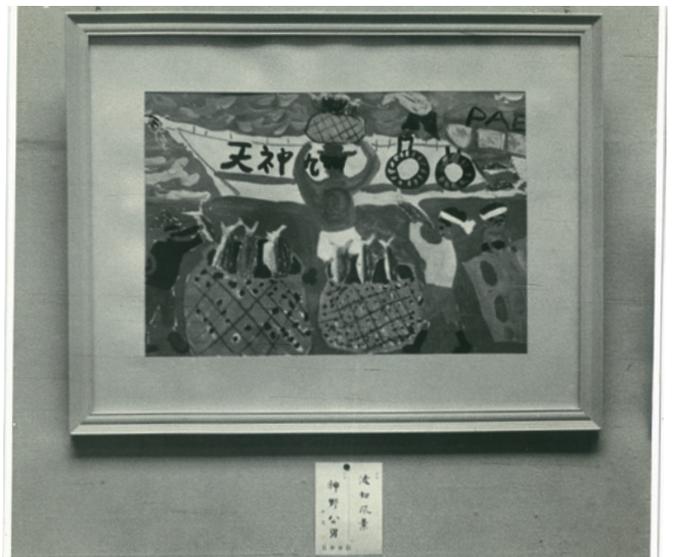


6歳のころ

## 「芸大には行かない」

そんな神野さんだが、高校時代はバドミントンに熱中して過ごす。

「僕が通っていた東海高校にはバドミンントンのコートがなく、コートのある場所まで毎日行って練習していました。東海高校のオーケストラ部は、いまでは活動が活発なことで知られていますが、僕のころは音楽をやっている友人はほとんどいませんでした。だからコンクールで人が足りないと、オーケ



小学校のころ、夏の合宿で描いた絵

ストラ部にしばしば駆り出されたりしました。でも、人に合わせて演奏するというのがあまり好きではなく、100年も昔に作られた曲を演奏することにも興味を持ってませんでした」。

絵を描くことから離れたのもそのころだ。

「中学では美術クラブに所属し絵を描いていましたが、アメリカやヨーロッパの美術が新聞に掲載されているのを見て、興味を持つようになりました。最先端の美術の情報がどんどん日本に入ってきたんです。イブ・クラインの作品が紹介されていたり。そういうものに触れるうちに、自分が描いた絵を見るのが嫌になり、描かなくなりました」。

「絵と音楽はもうやらない、芸大には行かない」と決め、同志社大学に進学。大学では、ドイツ語を専攻した。

## 大学卒業後はフランスへ

ギャラリストとなっても「売るより買う方が好き」という神野さんは、コレクターでもある。描くことをやめた神野さんを、美術を見る、買うという方向に向けたのは、フランスでの滞在経験だった。

「大学卒業後はドイツに留学するつもりで、就職せずに2年くらいふらふらしていました。しかし、一緒に留学するはずだった友人が行けなくなり、もうどこでもいいやとフランスへ。フランス語はまったくしゃべれませんでした。行けばなんとかなるだろうと」。

パリでは毎日のように美術館に行った。

「向こうの美術館はほとんどタダですから。毎日見に行っても、時間や天気により光の加減で見え方が違い、飽きることがありませんでした。あとはギャラリー。なかなか入りづらいギャラリーも多かったですが、外からのぞいていると『入っただい』と声をかけてくれるところもありました」。



パリに滞在していた20代のころ

## フランシス・ベーコンに衝撃を受けて

たまたま入った現代美術のギャラリーで見たアルマンやセザール。当時のフランスの最先端の美術は、瞬く間に神野さんを魅了した。

「ある美術館でやっていたフランシス・ベーコンの展覧会。てっきり16世紀の哲学者かと思って行ったら、まったくの別人で。同名の画家がいるとは思っていませんでした。でも、びっくりしたのはそのことではなく、これまで見たことがない絵画が会場に並んでいたことです。それで、ベーコンの作品を取り扱っていたクロード・ベルナルというギャラリーを、わざわざ探して見に行きました。そこにはベーコンのほかにもジャコメッティやホックニーの作品が並んでいて、現代美術に引き込まれていきました」。

フランスには約2年間滞在するも、父親が亡くなり、日本に呼び戻された。しかし、その後もパリにはしばしば足を運んだ。

「作家の黒田アキが大学の先輩で、パリに渡っていたので、その後も会いに行っていました。帰ってくると、彼の父親に彼の様子を報告しに行ったりと交流が続きました」。

黒田さんの作品のコレクターとしても知られる神野さんだが、このころからヨーロッパの現代美術をコレクションするようになる。



黒田アキさん(中)、美術評論家の本江邦夫さん(右)と

## ギャラリーたかぎに就職

神野さんはGallery HAMを開廊する前に、1970年代末からギャラリーたかぎに勤めている。ギャラリーたかぎは、当時、桜画廊とともに現代美術を扱っていたギャラリーで、名古屋市中区の名古屋観光ホテルの近くにあった。

「ギャラリーたかぎで仕事をするようになったのは、ギャラリーユマニテの西岡さんに勧められたのがきっかけでした。僕の後輩で画家の江口康隆くんが絵を買うのが好きで、西岡さんからよく買っていました。それで、江口くんから西岡さんを紹介されて、画廊に遊びに行くようになりました。そのころ僕は30歳を過ぎていましたが、帰国後も就職していなかったので、『画廊なら昼過ぎくらいから来ればいから、やってみたら』と」。

ここから神野さんは、80年代後半から90年代初めの現代美術黄金時代の先駆けとなる、名古屋のアートシーンにかかわっていくことになる。(次号に続く)

# 2012 1年をふりかえって

## 邦楽 北島 徹也 (中部日本放送)

昔のご旧家では自宅で邦楽の会を催すことがあり、その場合、関西は義太夫、関東は『三千歳』の余所事浄瑠璃のように清元という印象があるが、名古屋は長唄が多かったようだ。

さて、「第37回名古屋長唄大会」(2/19 芸術創造センター)に始まり、杵屋見音代主宰「第7回 見音代会」(3/25 中電ホール)、杵屋勝桃主宰「第16回 勝桃会」(4/15 千種文化小劇場)、稀音家六鈴友改め貴音鈴友主宰「第61回 友音会」(5/13 今池ガスホール)、「名古屋50回記念 吉住会」(6/23 中電)、杵屋喜多六主宰「第48回 長唄青陽会」(7/21 中電)、杵屋三太郎主宰「第19回 杵三会」(10/7 今池ガス)、杵屋彌四郎主宰「第20回 翠調会」(10/21 中電)、「第19回 杵屋六秋・杵屋六春 長唄おやこ会」(11/17 今池ガス)など恒例の会が催された。

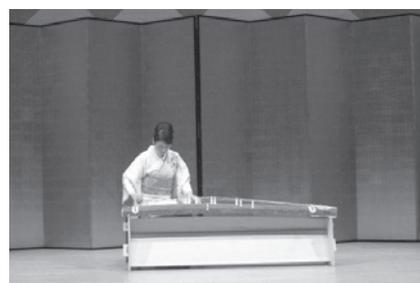
「友音会」では昨年末急逝された会主の夫君を偲んで追悼の曲が演奏された。「杵三会」では三太郎家所蔵の古曲から、天保年間に江戸中村座で初演された『道行霜夜の菊』に加え、会主が指導する椋山女学園大学附属小学校の生徒による『勸進帳』も演奏された。杵屋六春は小中学生に長唄三味線の楽しさを伝えたいと「ナゴヤコドモアートピレツジ 唄って弾いて楽しもう! 三味線体験」(8/28市民会館)の講師として、また古川美術館で美術作品を前に長唄の演奏(11/9)を行った。杵屋三太郎は「ファンタジックワールドJAPAN」(3/24 芸創)で洋舞と邦楽とのコラボレーションを試み、また、平成24年度文化庁「文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業」として「青少年のための長唄まつり」(12/2 芸創)が催され、長唄を習う子どもたちの発表があった。

三曲の国風音楽会「弁財天奉納 箏曲演奏会」(4/29

西文化小劇場)で『四季の花』を演奏されたが、この曲が同会以外に伝承が絶えた稀曲であることが調査の結果わかり大きく報道された(4/18 中日夕刊)。古曲をよく伝承した名古屋のゆかしい土地柄を偲ばせる佳話である。同会「創立120周年記念 箏曲定期演奏会」(10/7 中電)では名古屋系胡弓による『千鳥の曲』が若手を交えた11人で合奏され話題になった(10/4 中日夕刊)が、その曲を作曲した幕末名古屋の箏曲の作曲家・吉澤検校に焦点を当てた「郷土が生んだ名作曲家 吉澤検校 雅の世界」(10/13 アートピア)も催され「芸どころ」の蔵の深さを聴かせた。平曲の今井検校は「第19回 平曲鑑賞会」(6/16 西文化)、薩摩琵琶の北川鶴昇は「琵琶の宴」(5/27 今池ガス)、野村峰山は「竹の響き VOL.3 現代邦楽五番立」(11/17 能楽堂)を催した。

小唄の稲舟妙寿の稲舟派は「創立45周年記念小唄会」(4/1 御園座)を催し、新内勝知とは「名古屋邦楽大会」(11/23 中電)で功労者表彰を受けた。

「岡崎美奈江 箏・三絃リサイタルⅡ」(11/17 電気文化会館)は、芦垣美穂らの助演を得、『みだれ』『さらし幻想曲』などの演奏技芸において今後の名古屋の三曲を引き継いでくれるものが感じられ、名古屋市民芸術祭特別賞を受賞した。



名古屋市民芸術祭特別賞受賞  
「岡崎美奈江 箏・三絃リサイタルⅡ」  
(11月17日)

## 美術 日沖 隆 (美術批評)

2012年、景気の低迷で文化予算は厳しい緊縮が続く。美術館のコレクションの空白が心配になる。その反面、美術館の展覧会企画には様々な苦心の跡が見られた。

東海の各美術館はお互いの所蔵コレクションの一層の流通を図り、新たなテーマや価値を生み出そうとしている。春4月～6月にかけて催された愛知県美術館の「魔術／美術」はその好例だろう。この企画は愛知・岐阜・三重の三県で計画され、続いて開かれたシュールレアリスムの巨匠「マックス・エルンスト展」(7～9月愛知県美)や「ジェームズ・アンソール展」(豊田市美4～6月)を重ねて見ていくと、「異界の表現」にスポットをあてた幻視の技術の数々が、あらためて美術家の錬金術の魅惑と現代美術の

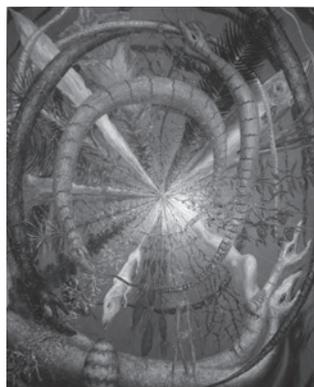
多様性を認識させていた。特に「魔術／美術」展は魔界への若い観客の関心呼び起こし、世界コスプレサミットとも合わさって、ポピュリズムに添う美術企画になっていた。

一方で、豊田市美術館と名古屋市美術館が連携企画した青木野枝「ふりそそぐものたち」は、すでに高い評価を得ていた女性彫刻家の世界を同時に紹介する展観で、この地域の人々に新鮮な彫刻概念をもたらすものであった。リニューアルオープンした岐阜県美術館の田口コレクション、安藤基金コレクションに基づく「三幕の物語」も戦後の美術史の軌跡と集積を示し、昭和と平成の現代アートを啓蒙する役割を果たしていた。

愛知ではトリエンナーレへ向けての情報がもっと聞こえて

欲しい。若手発掘への試みとして名古屋市美術館企画の「ポジション2012名古屋発現代美術」(6月～7月)や、愛知県美術館の「アーツチャレンジ」(2月)、APMoAプロジェクト・アーチ(年間)などの地道な活動は評価できるが、PR不足の感は否めない。

個展として充実していたのは、「原裕治」(8・9月一碧南市藤井達吉現代美術館)の回顧展だ。彫刻家としてのダイナミックで身体的な感性は、再評価にふさわしい価値がある。愛知県陶磁資料館の「西村陽平」展も土を焼くという行為の原初を考えさせる好企画だった。



設楽知昭  
(STANDING PINE)

ギャラリー個展では、「設楽知昭」展(STANDING PINE-cube)(5月)。独自の時間・空間の絵画追求は不思議さを増している。同ギャラリーで開かれた「鈴木由衣」ゴーザ壺(10月)も絵画と陶芸の古くて新しい関係を示し、新鮮だった。

一方、ケンジタキギャラリー

の4月の「杉戸洋 新作展」は方眼と風景視覚の融合を探り今後の展開が興味深い。1月の「若林奮」、10月の「村岡三郎」、11月の「戸谷成雄」などの思索的で重厚な立体展示もまた、同ギャラリーの貴重な足跡である。

さらには、ガレリア・フィナルテにおける「伊藤誠展」(5月)のFRP彫刻が空間の連続性と凹凸の反転対比への尽きぬ興味を引き起こし、「日野田崇」(11月)のポップな陶芸彫塑とともに魅力的な立体企画であった。また同画廊の3月「水谷イズル」(崩壊)展と6月の「吉岡俊直」(道しるべ)展の動感と凝縮を孕むビデオアートも秀逸だった。



伊藤 誠  
(ガレリア・フィナルテ)

名古屋の東部、ギャラリーID F、ギャラリーM、ギャラリー莽楽などでも魅力的な若手作家が活発に紹介されている。しかし、今度の3月、ギャラリーAPAが閉廊するニュースは残念であり、今年もプロ活動を支えるアートビジネスの支援の必要を痛感する1年だった。

## 文学

### 清水 良典 (文芸評論家・愛知淑徳大学教授)

東日本大震災と原発事故から一年が過ぎて、その衝撃に対する文学の側からの表現がそろそろ出現してきた。そのなか同人雑誌で最も直截にそれを表現しえたのは、磯貝治良の『消えた一小説「3.11」』(「架橋」31号)だろう。大地震が「精霊ガイナ」の蘇りとして、そして津波が黒い牛たちの大群が陸地に押し寄せる光景として、エネルギー溢るような叙事詩のように描かれるくだりには、息を呑んだ。また名古屋大学准教授、浮葉正親によって磯貝の半世紀以上にわたる文学活動を展望する研究フォーラムが7月に開かれたことも、モニュメンタルな出来事だった。

出版物では西出真一郎の『ろばのいる村』(作品社)を挙げたい。これまで何冊か刊行されたフランス紀行のシリーズでも一番まとまった良書だった。かつては人間の旅と労働の伴侶として全世界にいた愛すべき動物、ろばを求めてフランスの田舎道や村々を歩き回る紀行文集だが、エッセイの身近さと小説の結構を双方兼ね備えた文章の魅力はどんどん洗練されつつある。

名古屋と近隣に在住するプロ作家たちの活躍も盛んだった。まず諏訪哲史は、挑戦的な作品集『領土』(新潮社)をまとめ上げた。詩と散文のジャンルを越境し、諏訪の持ち味である官能と生理のないまぜになったイメージ世界を

極限まで拡張している。



金貸しから物書きまで

広小路尚祈の『金貸しから物書きまで』(中央公論新社)は、独特のペーソスとおかしみに満ちた文体で語られた自伝的な長編である。純文学の硬派と、人間臭い軟派の両面を兼ね持った広小路の、今後の活動の幅を広げる仕事といえる。また墨谷渉の中編「もし、世界がうすいピンク色だったら」(「群像」7月号)は、これまでの作品と一線を画す社会的な視野が前面に出た意欲作だった。



『グッモーエビアン!』  
©2012『グッモーエビアン!』製作委員会  
全国公開中 配給:ショウゲート

吉川トリコの活躍も順調だ。書下ろしを含めて連作をまとめた『東京ネバーランド』(実業之日本社)も好評だったが、名古屋を舞台とした快作『グッモーエビアン!』が映画化され、年末に公開された。今後の活動がさらにダイナミックになることが期待される。

※「邦舞」につきましては、お願いしておりました執筆者が体調不良のため、やむを得ず掲載を見合わせることにいたしました。関係の皆様にはたいへんご迷惑をおかけしますが、ご理解を賜りますよう、よろしく願い申し上げます。  
なお、次回は「邦楽・邦舞」の執筆を北島徹也氏にお願いする予定です。

# 名古屋市民芸術祭2012 名古屋市民芸術祭賞

名古屋市民芸術祭は総合的な芸術の祭典として、毎年10月、11月に開催しています。このうち参加公演において、特に優秀な公演に対し名古屋市民芸術祭賞を、特に表彰に値する公演に名古屋市民芸術祭特別賞が贈られます。

今年度につきましては、名古屋市民芸術祭賞は該当がなく、3公演に名古屋市民芸術祭特別賞を贈ることに決定いたしました。

## 名古屋市民芸術祭特別賞（3公演）



### 【音楽部門】(企画賞)

田中孔波ピアノリサイタル  
10月26日 電気文化会館 ザ・コンサートホール

フランス近現代のピアノ音楽の代表的で際立った特徴を持つドビュッシー、デュカ、デュテイユの作品を演奏して、フランス音楽の様相を表した企画が優れており、また難技巧を要求されるこれらの作品に対して正面から取り組んで成功した。これからの活動でさらなる芸術表現の深みを獲得されることを期待する。

### 【プロフィール】

05年：桐朋学園大学音楽学部卒業  
09年：オランダ・アムステルダム音楽院修士課程修了  
11年：第14回名古屋演奏家育成塾奨励賞  
12年：第7回全日本芸術コンクール第1位



### 【演劇部門】(グッドバランス賞)

名古屋シアター・アーツ公演  
「たとえば野に咲く花のように」  
11月16日～18日 名古屋千種文化小劇場

俳優の演技力が高く、人物像の表現に優れている。また、照明、落ち着いたセット、場面転換の手際の良さなど細やかな演出力も高く評価したい。脚本の良さを上手に引き出す演出である。演技、演出、脚本、すべてにバランスが取れており、安定感のある作品となっている。安心して見られる作品だ。今後は新しい試みに挑戦してほしい。

### 【プロフィール】

98年：名古屋シアター・アーツ 設立  
98年：旗揚げ公演「二人に乾杯」「フォーシーズンズ」上演  
05年：宮本研・作「ブルーストッキングの女たち」上演  
10年：はせひろいち・作「わが町～名古屋～」名古屋劇団協議会合同公演



### 【伝統芸能部門】(奨励賞)

岡崎美奈江  
箏・三絃リサイタルⅡ 未来へ～古典の輝き～  
11月17日 電気文化会館 ザ・コンサートホール

確かな演奏技術は、日々の真摯な努力の成果として『みだれ』、『さらし幻想曲』、『尾上の松』の箏に発揮され、『吾妻獅子』の三絃も同様に高い技量を聞かせた。師芸をよく継承し、今後、名古屋の三曲の次世代をリードする一人となるであろうことを十分に期待させる演奏であった。

### 【プロフィール】

89年：田村道子師(宮城社大師範)に師事  
00年：芦垣美穂師(宮城社大師範、名古屋音楽大学客員教授)に師事  
08年：NHK邦楽オーディション合格  
09年：名古屋音楽大学大学院修了  
09年：岡崎美奈江 箏・三絃リサイタル 未来へ～古典の輝き～開催  
11年：Mi piace concerto(箏・ソプラノ・ピアノジョイントコンサート)開催

**舞台VTR映像専科**  
ステージの感動を格調高い映像で追求します。

ビデオソフトの企画・制作

有限会社 **イーワン・ビテオ・システム**  
TEL (052)896-2256 FAX (052)896-4100

**TOKAI VIDEO SYSTEM**

ハードシステム 部門  
AV機器販売部門 (家庭用)  
映像企画・制作部門  
放送関連部門  
機器設備レンタル部門

映像メディアの未来を創る  
生きた情報を発信

**TVS 株式会社 東海ビデオシステム**  
名古屋市中区上筒井二丁目14-15 TEL.<052>322-6541(代表) 6562(芸能部)

innovason Ether  
**LACOUSTICS ES**  
Sound  
lake  
whirlwind

■ホール舞台音響設備 販売、設計、施工、保守

**AV 株式会社イーアンドブイ**  
〒464-0846  
名古屋千種区城木町二丁目98  
TEL 052 (761) 5400  
FAX 052 (761) 0909

## 第8回 尾張名古屋バンド決戦!

多数の応募の中から選考された、地元の青少年アマチュアバンド10組がナンバーワン!を目指して演奏します。  
(優勝賞金30万円、準優勝賞金10万円)

日 時	3月3日(日) 13:00~18:00
会 場	青少年文化センター アートピアホール
料 金	500円<全自由席>
出 演	Liar Ghost、ZENMAI、仙人掌人形、袈裟丸 祐介 lackluster、Mi-Solfa、HOTNOTE、Lindr Rond コスモナウト、RED BOOTS FACTORY(出演順)
主 催	名古屋市文化振興事業団、東海テレビ放送、東海ラジオ放送 FM AICHI、ZIP-FM
協 力	エレクトリックレディランド、ハートランドスタジオ ヤマハミュージックパブリッシング、音楽情報サイトえびてん! CRYSTAL GEYSER
問い合わせ	名古屋市文化振興事業団チケットガイド TEL 052-249-9387



第7回優勝バンド PEAK. 撮影: 安田典謙



## 「ショートストーリーなごや」 第6回コンテスト事業 受賞作品決定

名古屋のまだまだあまり知られていない魅力を発信するため、名古屋を舞台にした短編小説を募集するコンテスト事業「ショートストーリーなごや」。6回目を迎える今年度も全国各地から応募があり、作品数は345編にのぼりました。この度、委員長である清水義範氏(作家)をはじめとする最終選考委員によって、大賞1編・佳作2編を選考しました。

大賞「『なごやの喫茶店』」 (大平茉衣子・作)

佳作「ばあちゃんのパンツ」(丹羽一美・作)

「点の世界」 (加藤恵美子・作)



大平茉衣子



丹羽一美



加藤恵美子

今後、受賞作品をまとめた作品集を制作し、市内各所で配布する予定です。

「ショートストーリーなごや」ウェブサイト ([http:// www.s-story.org/](http://www.s-story.org/)) にも受賞作品を掲載しております。

問い合わせ) 名古屋市文化振興事業団 事業案内 TEL 052-249-9387

あなたの芸術文化ライフを総合的にサポートします!  
公益財団法人名古屋市文化振興事業団

## 「友の会」会員大募集!

### エンジョイコース (年会費 3,000 円)

- ・事業団主催公演チケットの割引販売!
- ・事業団主催公演指定席チケットの先行販売!
- ・「友の会だより」「なごや文化情報」を毎月お届け! など

### クリエイティブコース (年会費 15,000 円)

- ・会員主催の公演チラシを事業団管理運営施設へ配送!
- ・会員主催の公演チラシを友の会会員へ配布!
- ・会員主催の公演で事業団の後援名義が使用できる! など

名古屋市文化振興事業団 事業案内  
TEL 052-249-9387

## 名古屋市文化振興事業団 事業案内・チケットガイド

名古屋市中区栄三丁目18番1号 ナディアパーク8F  
TEL 052-249-9387/平日9:00~17:00※郵送対応可

### ○事業団主催事業のお問い合わせ

### ○チケット販売

- ・事業団チケット販売システムでのチケットの販売(「チケットぴあ」の取り扱いはありません。)
- ※チケット販売システムで販売のチケットは名古屋市文化振興事業団が管理運営する文化施設窓口でもお求めいただけます。(東山荘を除く)
- ・事業団友の会クリエイティブコース会員様のお預かりチケットの販売。

### ○文化芸術相談窓口

### ○チラシの受付

## 「なごや文化情報」編集委員

飯塚恵理人 (椋山女学園大学文化情報学部教授)  
小沢優子 (名古屋音楽大学講師)  
倉知外子 (オクダ モダンダンス クラスター副代表)  
酒井晶代 (愛知淑徳大学メディアプロデュース学部教授)  
田中由紀子 (美術批評/ライター)  
はせひろいち (劇作家・演出家)

当事業団の募集する事業にお申し込みいただいた場合の個人情報は、当該事業に関する事務連絡及び、当事業団の文化事業に関する案内のみに使用させていただきます。

## プレメジャーデビューライブ 2013 Spring

## 南 里沙 クロマチックハーモニカ スタジオミニライブ

すべての音が出せる“クロマチックハーモニカ”を自在にあやつり、ギターとベースのトリオによる迫力の生演奏でお届けするライブです。ハーモニカ界のヴィーナス“南 里沙”が、スタジオという狭い空間を、圧巻の演奏と素敵なトークで満たす夢のひと時を、ぜひお楽しみください。

- 日 時** 3月17日(日)17:30  
**会 場** 青少年文化センター7階 第1スタジオ  
**出 演** 南 里沙(クロマチックハーモニカ)、渡邊具義(ギター)、山地恒太(ベース)  
**曲 目** ルパン三世、津軽海峡冬景色、チャルダッシュ 他  
**料 金** 1,200円<全自由席>  
 ※友の会会員は1,000円(前売のみ)  
 ※未就学児の入場はご遠慮ください  
**問い合わせ** 名古屋市文化振興事業団チケットガイド TEL 052-249-9387 ※1/30(水)9:00~



南 里沙

## セントラル愛知交響楽団 オーケストラの日2013

3月31日はオーケストラの日です。昭和のメロディーを14名のオーケストラのアンサンブルと歌でお贈りします。

- 日 時** 3月31日(日)15:00  
**会 場** 港文化小劇場  
**出 演** 池田京子(ソプラノ)、セントラル愛知交響楽団(演奏)  
**曲 目** 第1部 昭和なつかしのヒットソングをオーケストラで  
 勝手にしやがれ、川の流れるように 他  
 第2部 歌とオーケストラでつづる昭和の歌  
 宵待ち草、時の流れに身をまかせ 他  
**料 金** 1,500円<全自由席>  
 ※友の会会員は1割引(前売のみ)  
 ※未就学児の入場はご遠慮ください  
**問い合わせ** 名古屋市文化振興事業団チケットガイド TEL 052-249-9387



池田京子



セントラル愛知交響楽団

## 名古屋市文化基金のご案内

## 名古屋の文化を創るのは、あなたです。

名古屋市文化基金(名古屋市民文化振興事業積立基金)は、市民生活に潤いをもたらす名古屋の文化の発展のために、昭和57年に設置されました。この基金は、皆様からのご寄附と市の出資金を積み立て、その運用による果実(利息)で、市民の文化振興のための事業を実施することに役立てられています。

皆様からのご寄附をお待ちするとともに、今後もご支援、ご協力をお願い申し上げます。

## 参加体験事業

市民の皆様が参加・体験できる事業を積極的に展開しています。

## 鑑賞事業

伝統芸能をはじめ、優れた舞台芸術を紹介しています。

## 支援育成事業

市民の皆様が行う創造的な文化活動を支援しています。

## 情報発信事業

「なごや文化情報」などを発行し、文化情報を広く提供しています。

## 名古屋市文化基金は、ふるさと寄附金(納税)制度の適用対象となります。

※名古屋市民の皆様方が、名古屋市文化基金に寄附される場合も、この制度によって税額控除を受けることができます  
 税控除等の詳細につきましては、リーフレット又は市公式ウェブサイトをご覧ください

## 問い合わせ

名古屋市市民経済局文化振興室 TEL 052-972-3172  
 公益財団法人 名古屋市文化振興事業団 TEL 052-249-9390

詳しくは、市公式ウェブサイト トップページ

文化 基金

検索



感動を育てる種をまこう。  
 名古屋市文化基金